

う特殊性からDI活動を多面的に進めてきたが、その経過を解析したので報告する。

日本薬学会で示されたDI活動の内容は10項目からなっているが、当院においては2・3検討中のものもあるが、ほぼ大部分が実施されていることがわかった。

医薬品に関する問い合わせは、即答できる簡単なものは除き、調査し資料をもって解答したものはDIカードに記載し整理している。開院時からこのカードを集計し、解析した結果次のことがわかった。質問数は僅かではあるが年々増加し、質問者は本学職員が約80%、学外からは約20%であり、質問内容は薬理作用、薬物療法、消毒・

製剤、錠剤鑑別等が多いことがわかった。これらの質問には、日本医薬品集やExtra Pharmacopoeiaをはじめ専門の図書を利用することが多いが、特に薬物療法や副作用については洋書に有用なものが多いことがわかった。質問の内容から、他科で投与されている薬物が歯科の治療に影響を与えたり、口腔内に副作用を発生させたりしているケースがいくつかあったことから、今後とも注意を払うべき問題と考えられた。

今後、これまでの活動内容の一層の充実と、我が国においてはまだ十分整理されていない歯科薬物療法の情報の収集と整理を行っていきたいと考えている。

8. *Candida albicans* の厚膜胞子形成培地の検討

鎌口有秀, 馬場久衛, 金森啓子,
田中かえで, 小松 始, 野崎善弘,
越前敏広 (口腔細菌)

(目的) *Candida albicans* (*C. albicans*) の厚膜胞子(CH)形成能は臨床分離株の同定の際に最も重要視されている性状である。CH形成培地として多くの培地が報告されているが、一般的に使用されているものはコーンミール寒天培地に Tween 80 を添加したもの(CM)である。しかし、この培地でのCH形成には3ないし4日間の培養時間がかかるという欠点がある。そこで、演者らは20時間以内でCH形成性が判別できる培地の処方について検討を行った。

(方法) CH形成性の異なる当教室保存の*C. albicans* 15株を種々の組成のCH形成培地に塗抹し、25℃、20時間培養後、100倍で直接検鏡し、CH形成性について比較検討した。

(結果及び考察) 培地のコーンミール濃度は従来の量より30%減じた培地の方が各菌株において良好であった。

また、細胞壁の一成分であるN-Acetylglucosamine (GlcNAc) を培地1ml当り1mg添加することによって各菌株のCH形成性がさらに良好になった。さらに、培地のpHを従来使用しているpH6.2より7.2に上げることによって各菌株ともCH形成性が良好となった。そこで、コーンミール濃度を従来の70%とし、GlcNAcを1mg/mlに添加し、さらにpHを7.2に調製した培地(0.7CMG)を作製し、従来のCM培地とCH形成性を比較したところ、0.7CMGにおいて15株の全ての菌株でCHの形成がみられ、CH形成数も多かった。また、BSも少なくCH観察には良好であることが判明した。さらに、*C. albicans* 鑑別のもう一つの指標であるgerm tube形成性においても0.7CMG培地はCM培地に比べて優れていることが判った。

9. ラットの歯髄・腎臓・小腸および顎下腺アルカリフォスファターゼ活性のEDTAによる阻害と再活性化

長谷田順子, 相良りか子, 東城庸介,
松本仁人 (歯科薬理)

アルカリフォスファターゼ(AlPase)はZnやMgイオンを含む金属蛋白質であり、EDTAなどの金属キレート剤により失活する。ところで、AlPaseは臓器により酵素化学的性質が異なることが知られている。今回、ラ

ットの歯髄、腎臓、小腸および顎下腺のAlPaseについて、EDTAや二価陽イオンの効果に臓器特異性があるか否かを検討した。また、各臓器のAlPaseの電気泳動パターンを比較した。